

令和8年度までの目標	国語		算数	
	自校A B層の割合 (令和4年度～)	59.2% → 70.0% 令和6年度：65.8%	自校A B層の割合 (令和4年度～)	47.3% → 60.0% 令和6年度：56.0%

目標達成に向けた取組			
3つの観点	教員の指導力向上	基礎学力の保障	学習習慣の確立
学校全体の取組	○毎時間の授業で、具体的な「学習のめあて」を示すとともに、そのめあてに沿った学習の振り返りとまとめを行うことで、指導と評価が一体化した授業となるよう改善に努める。 ○日々の授業で児童のよいところを見付け、それを言葉で伝えることで、児童が毎日成長を実感できるようにするとともに、児童との信頼関係を築く。 ○児童に「分からないこと」を恥ずかしいことと思わせない学級・専科経営に努めるとともに、常に児童に寄り添い、対話をしながら「あなたはどうか考えますか」と問いをつなぐ指導に努める。	○東京ベーシックドリルを活用した診断テストを年3回実施し、算数の基礎的な事項を漏れなく定着できるようにする。 ○学期ごとにその学年までに習った漢字のまとめテストを実施し、未達成者には再テストを必ず実施することで正しい文字を丁寧に書くことができる児童を育てる。 ○自分の意見や考えをまとめる場面において学習した漢字を正しく使って書けるように指導することで、思いを自在に表現できる児童を育てる。 ○習熟度別算数授業のクラス分けを毎単元に行い、児童が苦手とする事項の早期発見・早期対策に努める。	○学期の始めと終わりに「キャリアパスポート」を活用した中・長期的なめあての設定と振り返りができるようにし、何事にも自分事として捉えながら目標に向かって繰り返し取り組み、やり遂げる児童を育てる。 ○従来型の教科書・ノートを使った読み書きの学習と、個人のICT端末を活用した学習（ドリルパーク等）をバランスよく取り入れ、場面に応じた多様な学び方に対応できる児童を育てる。 ○保護者の協力を仰ぎながら家庭学習及び家庭自主学習の毎日の実施に努めさせ、学年を追って少しずつ、集中して学習に取り組める児童を育てる。
特に支援が必要な児童への手立て	○自分の学習に自信をもてない児童や、学習への意欲をもてない児童に向けて、確実に答えられそうな問題を意図的に提示することで、全ての児童が分かる喜びを共有しながら学習に臨めるようにする。 ○不登校傾向にある児童や、教室での一斉指導を苦手とする児童への個別の支援を充実させ、本人と家族の双方が学習への不安をもたないように努め、いつでも学習を再開できる環境を整える。	○D層の児童を中心に、本校独自の放課後補習「うきうきタイム」への参加を促し、1問ずつ着実にできる問題を増やすことで、分かる喜びを実感できるようにする。 ○入学間もない1年生には、様々な学習場面で具体物を用いた指導を心掛け、「言語感覚」や「数感覚」の育成に努める。 ○進学を控える6年生には、他学年の既習事項についても確認しながら学習を進め、小学校での学びに自信をもって進学できるようにする。	○目標の設定が難しい児童には個別に対応し、自分の努力で達成できそうな目標をスモールステップで設定するとともに、学期の途中で達成できた場合には新たな目標設定の支援を行う。 ○学習用タブレットを含めた電子機器への依存傾向がある児童には、保護者と連携しながら利用時間や用途の約束を設定し、学習・生活の両面から児童の習慣を整える。（宇喜田小SNS学校ルール、えどダブルルールの周知・徹底）
成果指標	○国調査「自分には、よいところがあると思いますか」肯定的回答率 23.1% → 80%以上 ○国調査「人が困っているときは、進んで助けていますか」肯定的回答率 87.2% → 90%以上 ○不登校児童の登校再開数・在校時間の拡大	○国調査「D層」児童の割合 国語12.3% → 10%以下(R6：20.8%) 算数21.7% → 15%以下(R6：20.8%) ○国調査「CD層」児童の割合 国語40.8% → 30%以下(R6：34.2%) 算数52.7% → 40%以下(R6：44%) ○東京ベーシックドリル及び 学期ごとの漢字まとめテスト達成率100% ※全児童が全ての問題を解ける（達成率100%）まで、同一問題を反復実施	○国調査「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」肯定的回答率 83.3% → 90%以上 ○国調査「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」肯定的回答率 79.5% → 85%以上